

# 時間名詞の特性に関する一考察

## 一格助詞「に」との共起に注目して一

丹 保 健 一

### A Study of the Characteristics of Time Nouns: Focusing on the Co-occurrence with the Case Particle "ni"

Kenichi TAMBO

#### 0. はじめに

生起(状況)を表す時間名詞が、格助詞「に」の接続を許す場合と許さない場合とがある。その際、どのような時間名詞が格助詞「に」の接続を許し、どのような時間名詞がそれを許さないのかについては既にいくつかの考え方が示されている。しかし、必ずしも納得できるものとは言えない。

本稿では、「相対時間名詞」(今日・きょう、明日・あす、昨日・きのう)の「現場指示性」に着目し、「今日(きょう)」、「明日(あす)」、「昨日(きのう)」などの「相対時間名詞」においては、その語彙特性としての「現場起点指示性」(仮称)が格助詞「に」との共起を妨げている可能性が高いことを指摘した。

#### 1. 時間名詞と用例採集資料について

##### 1-1. 時間名詞について

本稿が扱う時間名詞は現代語を対象としている。現代語は明治以降の使用言語を指す。明治、大正期の作品には、昭和30年代以降のそれとは異なる使用例も見られるようであるが、そのことについては別の機会に触れることにしたい。あくまでも現在使用されている日本語における時間名詞の大まかな特性を見ることを目的としたい。厳密に言えば、現在使用されている言語、昭和30年代以降の言語を中心に考えている。

時間名詞の定義はいずれ行うことにし、本稿では次(表1)のような名詞をとりあえず時間名詞の代表的なものとしておきたい。

下記に示した時間名詞は、(1)『分類語彙表』の「時間 1.16～」に分類されている名詞で、かつ、『日本語教育のための基本語彙調査』の「基礎二千」に含まれている名詞、並びに(2)時点を表す「～時(じ)」「～日(にち)」「～月(げつ)」「～年(ねん)」である。「梅雨」などについても考えなければならぬが本稿では扱わないことにする。

表1. 本稿で扱う時間名詞一覧

あいだ, 間	あさって, <明後日>	いご, 以後
あき, 秋	あした, <明日>	いぜん, 以前
あさ, 朝	あと, 後	いつ, <何時>

いっしょう、一生	さっき、	はつか、《二十日》
いま、今	さらいねん、再来年	はる、春
うち、内	じかん、時間	ばん、晩
おととい、〈一昨日〉	じだい、時代	ひ、日
おわり、終わり	しゅう、週	ひさしぶり、久し振り
かこ、過去	しゅうかん、週間	ひづけ、日付
かよう、火曜	じゅん、順	ひま、暇・×隙
かん、間	じゅんじょ、順序	ひる、昼・△午
きかい、機会	しょうがつ、正月	ひるま、昼間
きかん、期間	しょうわ、昭和	ふだん、不断・普段
きせつ、季節	しんねん、新年	ふゆ、冬
きのう、《昨日》	すいよう、水曜	まいあさ、毎朝
きょう、《今日》	せいねん、青年	まいしゅう、毎週
きょねん、去年	ぜん、前	まいつき、毎月
きん、金	せんげつ、先月	まいとし、毎年
きんよう、金曜	せんしゅう、先週	まいにち、毎日
けさ、《今朝》	ただいま、△唯今・×只今	まいねん、毎年
げつよう、月曜	たちば、立場	まいばん、毎晩
げんざい、現在	たび、度	まえ、前
げんだい、現代	たんじょうび、誕生日	みらい、未来
ご、後	ちゅう、中	むかし、昔
ごご、午後	ついたち、《一日》・×朔	むこう、向こう
ごぜん、午前	ついで、△序で	むちゅう、夢中
ことし、《今年》	つき、月	むつつ、六つ
このあいだ、×此の間	つぎ、次	もくよう、木曜
このごろ、×此の×頃	つね、常	やすみ、休み
これから、	どうじ、同時	やま、山
ころ、×頃	とき、時	ゆうがた、夕方
こんげつ、今月	ところ、所・△処	ゆうべ、夕べ・△夕
こんしゅう、今週	とし、年・△歳	よなか、夜中
こんど、今度	とちゅう、途中	よる、夜
こんばん、今晚	どよう、土曜	らいげつ、来月
こんや、今夜	なか、中・仲	らいしゅう、来週
さいきん、最近	なつ、夏	らいねん、来年
さいご、最後	にちよう、日曜	～時(じ)
さいしょ、最初	のち、後	～日(にち)
さいちゅう、最中	ばあい、場合	～月(つき)
さき、先	はじめ、初め・始め	～年(ねん)
さくねん、昨年	はたち、《二十》・《二十歳》	

本稿は、格助詞「に」との共起を妨げている「相対時間名詞」の特性を明らかにすることを主たる目的としている。煩雑にならないよう、上記のうち、相対時間名詞の代表としての「今日（きょう）」、「明日（あす）」、「昨日（きのう）」、絶対時間名詞の代表的なものとしての「～月（げつ）」「～日（にち）」「～時（じ）」、そして、その中間的な時間名詞としての「春（はる）」、「夏（なつ）」、「秋（あき）」、「冬（ふゆ）」、さらに、指示性（その語が他のものを指していること）を持つ時間名詞としての「翌日」「前日」「翌年」「前年」を主たる対象としたい。（注；「毎日」「毎年」「当時」「近年」や「今日（こんにち）」「明日（みょうにち）」「昨日（さくじつ）」などについての本格的な考察は別の機会に譲ることにしたい。）

なお、次のような「時間名詞+に」の例は、格助詞「に」が、（主文の）述語によって示されている現象が起こっている時間を示しているとは言えないものであり、対象としない。（用例はすべて『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』による）

【昨日に】かわって、【昨日に】もまして、【昨日に】引きつづき、【昨日に】比べて、  
【今日に】いたっている。【今日に】かぎって、【今日に】かけて、【今日に】なって、  
【今日に】始まった事、【今日に】至った。【明日に】しよう、  
【明日に】のぼして、【明日に】ひかえた、【明日に】差し支えるわ、  
【明日に】持ち越すなど、

その他、「今日／明日+にでも」、「今日／明日+にも」、「今日／明日+には」のように、「にでも」「にも」「には」の形式も対象としない。

## 1-2. 用例採集資料について

用例は、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』（翻訳小説及び「新源氏物語」は除く。以下「新潮 100」と略称する。）、『CD-ROM 版 新潮文庫明治の文豪』（以下「新潮明治」と略称する。）、『CD-ROM 版 新潮文庫大正の文豪』（以下「新潮大正」と略称する。）、『毎日新聞 '97 データファイル集』（以下「毎日 97」と略称する。）によっている。「新潮 100」「新潮明治」「新潮大正」「毎日 97」の他、『青空文庫』も参考にした。

## 2. これまでの研究の成果と問題点

時間名詞と格助詞「に」との共起（接続）に関する説明は、大別すると次の三つの考え方にまとめることができよう。

- ① 設定と特定
- ② 相対的時間と絶対的時間
- ③ 近接性

上記の三つの視点については、首肯できる点も多いが、格助詞「に」との共起については未だ十分に説明している言えないように思われる。これらの考え方の問題点については、すでに伊藤（2008）の指摘があるので、ここでは割愛したい。（伊藤の指摘にも若干の問題はあるが、煩雑になるのでそれにも触れない。）

上に挙げた三つの視点の中で最も分かり易いものは、「今を基準とする相対性の有無」であろう。本稿は、「今を基準とする相対性」を有する語が「に」と共起しないことに注目し、「今を基準とすること」の内実に迫ろうとしようとするものである。

### 3. 時間名詞の意味特性と用法

#### 3-1. 時間名詞の意味特性概観

最初に、時間名詞の特性について概観しておくことにする。

- (a) 「時間名詞」に格助詞「に」が接続しないものの代表として、「今日」「明日」「昨日」などがある。これらは「今を基準とする相対的な時間」を表しており、「相対時間名詞」と呼ばれることがある。これらの名詞は、時間的な幅・広がりを持ち、「中（じゅう）」や「のあいだ」などと共起する。しかし、時点を表すことはなく、「頃」とは共起しない。
- (b) 「時間名詞」に格助詞「に」が接続するものの代表的なものとして、「（～日）～時（じ）」「（～月）～日（にち）」「（～年）～月（がつ）」などがある。これらは、「絶対時間名詞」と呼ばれることがある。これらの時間名詞は、広がりを持たず、「中（じゅう／ちゅう）」や「のあいだ」などとは共起しない。これらは、時点を表し「頃」とは共起する。「～時（じ）」「～日（にち）」「～月（がつ）」は、格助詞「に」を伴わないで用いられることもあるが、次に示すように、事象全体がどの時点において起こったかを示す場合に用いられ、動作・行為が行われる時点ではない点で大きく異なる。限定された用法である。参考として挙げた⑥⑦の「～のが+時間名詞」、「～のは+時間名詞」は本稿では扱わない用例である。）

- ① 雁の寺他. TXT 雪州は徳全と本堂にきて、慈念の維那で通夜経をすませると、すぐに帰っていった。夜、十【一時、】徳全が本堂にきて、下間にいる猪之吉、伝三郎、平吉、作造の前で経をよんだ。経が終ると、慈念は、
- ② 二十歳の. TXT 十七日午後十【一時、】十八日午前【八時、】東大の要請により八五〇〇名の機動隊が学内突入。ガス銃、放水等により実力排除。
- ③ 戦艦武蔵. TXT 副長の加藤大佐はすぐに艦橋に上り、艦長に頼み込んで海上を探照灯で照射しつづけてもらった。しかし敵潜水艦の多い海面で光を放ちつづけることはきわめて危険なので、午後十【一時、】搜索を打ちきった。加藤は、駆逐艦上に救助された者のうち六名がそのまま息絶えたことを知った。
- ④ 戦艦武蔵. TXT 長崎警察署に集った六十名ほどの特高係の刑事たちは、ピストルで武装し警察の裏口から出ると、思い思いの道をたどって支那人街に向った。午前【一時、】かれらは、一斉に中国人の家に踏み込み、家宅捜査をするとともに、成人に達した男たちを一人残らず道路に突出し、警察に連行した。中国人たちは、警察の武道場に押しこめられ、翌日から一人一人呼出されると、執拗な刑事の訊問を受けた。
- ⑤ 金閣寺. TXT 帰った老師は和尚と酒を酌みかわし、夜中の零時半ごろ、朋輩の徒弟が和尚を寝所に案内した。それから老師は開浴と謂って風呂に入り、二日の午前【一時、】撃柝の声も納まって、寺は静かになった。雨はなお音もなく降っていた。

参考：

- ⑥ 放浪記. TXT 階下でかたくりのねったのをよばれる。床へはいったのが十【一時、】今夜も隣のマズルカが流れて来る。コウフンして眠れず。
- ⑦ 孤高の人. TXT それだけは昔のままだった。「店が終るのは十【一時、】それからあとしまつをして帰るのが十二時ごろ、だから——」園子はあたりを気にするように見廻してから、

(c) 格助詞が接続することもしないこともある代表的な時間名詞に「春」「夏」「秋」「冬」などがある。「相対時間名詞」「絶対時間名詞」の中間的な時間名詞とでもいう時間名詞である。(仮に、「中間時間名詞」と名付けておく。) これらの名詞は、格助詞「に」を後接しない例もあるが、後接する例もかなり見られる。

これらの名詞は、「中(じゅう/ちゅう)」や「のあいだ」などと共起し、時間的な広がり・時副を表すことができる時間名詞である。しかし、その一方、「頃」とも共起し、時点を表すこともできる。

- ① 鮎太は一年生の間だけ家から通学したが、二年になった【春、】父の台北への転任と同時に寄宿へ入った。(あすなろ.TXT)
- ② 明治七年(一八七四年)七歳 【春、】養父の女性問題から家庭不和が生じ、養母とともに一時生家に引き取られる。(こころ.TXT)
- ③ 和助は去年の【春に】結婚し、今年の夏に女の双生児ができたので、家が狭いのを苦しめていた。(さぶ.TXT)
- ④ そのためあって、星は「三十年後」と題する未来を舞台にした小説めいたものを書き、大正七年の【春に】出版した。(人民は弱.TXT)

(d) 以上の三つの範疇に入らない時間名詞もある。「翌日」「前日」「翌年」「前年」がそれである。

これらは、指示性を持つ点で、「今日」「明日」「昨日」と類似性を持つが、現場性でない点で異なる。格助詞「に」と共起する点においても、「今日」「明日」「昨日」と異なる。これらの時間名詞を間接指示時間名詞と仮称しておく。

- ① そうして、一を消した【翌日に】、私が帰ってくるのであった。(忍ぶ川.TXT)
- ② その返事は【翌日に】はいった。(点と線.TXT)

この他、「毎日」「毎週」「毎月」、「今」、「当日」、「当時」、「近日」等もあるが、「明日(みょうにち、あした)」「今日(こんにち)」「昨日(さくじつ)」等なども含め、別の機会を期したい。

### 3-2. 「相対時間名詞」(「昨日」「今日」「明日」)の特性と用法

すでに示したように、格助詞「に」と共起しない「今日(きょう)」「明日(あす)」「昨日(きのう)」などの「相対時間名詞」が、「今を基準とする相対的時間」を表すことは既に指摘されている。それでは、「今を基準とする相対時間を表すこと」と格助詞「に」との共起を許さないこととの間にどのような関連があるのだろうか。

「今を基準とする相対時間を表すこと」を「明日」を例にして説明すれば、「今」を基準にしてとは、「発話時」である「今」を基準としてであり、その「発話時」である「今(今日)」に接して時間の後方に位置する「一日」を「直接指している」と考えられる。ここで重要なのは、時間的な方向を「直接指していること」、そして、指されている内容が、「一日」という「広がり」と「範囲」を持つことである。

「相対時間名詞」が時間的な方向を「直接指していること」は、指示語研究において言われている「現場指示」の「現場」に通じるものであると考えることができるのではなかろうか。もちろん、指示内容は「これ」「それ」「あれ」「どれ」などの指示語とは違い、相対時間名詞自身が持っている時間的な

広がり（「今日」や「明日」などでは「一日」、「今月」「来月」では「年」という範囲を持つことになる。「翌日」や「翌年」にも指示性が見られるが、これらは「今」という基準を持たない。つまり、「現場性」を持たない。

このような特徴は、「今日（きょう）」「明日（あす）」「昨日（きのう）」に特徴的と思われる、「この」、「その」、「あの」、「どの」といった指示語が前接しないことへの説明ともなり得よう。（少なくとも「新潮 100 冊」「毎日 97」において、現象が起きている時間を表す相対時間名詞に「この」、「その」、「あの」、「どの」が前接する例は一例も見つからなかった。）それは、「相対時間名詞」は、すでに「現場指示」という「直接的指示性」を持っており、それ以上の指示を受け付けないからだ」と説明することができよう。次の（1）は、「青空文庫」の用例であるが、（1）の読みは「あした」である。

- （1）自分は【その明日】（あした）病院へ行って三沢の顔を見るや否や、「もう退院は勧めない」と断った。（tomodachi.txt）

格助詞「に」が接続しないことも、現場（直接）指示が「広がりのある時間」という時間を指示しており、格助詞「に」の接続よっても「時点」として限定し直すことができないと考えることができよう。「春」「夏」などは、本来広がりのある時間を指すものの、格助詞「に」と接続することによって時点を表すことができる。それは、そのような縛り（現場指示性）がないからであると考えられよう。

指示詞＋相対時間名詞の形式は見られるが、それは下記のように状況時間を表す例ではない。（指示詞＋相対時間名詞の形式を持つ例は、「新潮 100」では次の①②の 2 例のみ、「毎日 97」では次の③④⑤の 3 例が見られた。）

- ① さればこそ、いまは古わらじにもひとしい將軍家をかつぎまわり、【その明日】の価値を田舎大名どもに説いてまわっているのではないか。（国盗物語.TXT）
- ② 「【その今日】の時勢が、あの人たちにはいけないのだよ。（路傍の石.TXT）
- ③ 97/06/12（夕）[文]：52278|「マハトマ・ガンジー、【その今日】的意義」と題して、ガンジー氏が祖父の思想と行動を語る。（mai 9706.txt）
- ④ 97/11/22（朝）[一]：90243|【その明日】はどうなるか。（mai 9711.txt）
- ⑤ 97/12/25（朝）：113135|【その明日】を担う子供たちに故国に伝わる民話を伝えよう——と呼びかけていた関西のボランティアグループ「毎日国際ボランティア・ネットワーク（MIVN）」（新谷義明会長、11人）の運動が実を結び、来年 1 月 1 日、クメール語の原文と日本語訳を併記したカラフルな絵本「ウサギとタニシ」が刊行される。（mai 9712.txt）

### 3-3. 「絶対的時間名詞」の特性と用法

時点を表す時間名詞である「～月」、「～日」、「～時」は、「に」を後接するのが一般的である。しかし、既に指摘したように、「に」を後接しない例も見られる。

これらは、これまでの研究の指摘から言えば、時の「設定」である。しかし、より広く考えれば、これらは「取り立て」と言うことになる。「絶対名詞＋に」は取り立ての対象となりにくいためにこのような「に」を共起しない形式を取るようになるのだろう。時点を表す時間名詞が格助詞を伴わない例は、既に指摘したように限定されたものである。

（注：取り立て易い時間名詞と取り立てにくい時間名詞の別については、ここでは、「対象として共有化できる概念であるか否か」によるとしておく。）

## 3-4. 「中間時間名詞」の特性と用法

「春」「夏」「秋」「冬」の用例を見ると、「に」が共起（後接）する例もしない例も見られる。しかし、「新潮100」を見る限りにおいてはではあるが、両者の出現率には大きな相違が見られ、「に」が接続する例は少ない。これらの時間名詞が基本的には、広がりのある時間を表すからであろう。また、格助詞「に」が接続する場合、何らかの修飾限定があるか、季節一般を表すか、又は文脈によって限定されていることが条件となろう。

- ① 相手は、十年前の約定を忘れてはいなかった……去年の【春に、】その男から念押しの手紙が大原へ来て、大原から兄の屋敷へ送りまわされてきた」（剣客商売.TXT）
- ② 彼は半年ほど前の一九七三年【春に、】六年間勤務したコロラド大学を解雇された。（若き数学.TXT）
- ③ 【春、】新葉とともに淡紫色の花をつけ、秋になると楕円形の実が熟し、縦にさけ強い甘味をもつ。（雪国.TXT）
- ④ 昭和二年（一九二七年）十八歳 【春、】肋膜炎にかかり一年間休学。（李陵他.TXT）

## 3-5. 文脈（間接）指示時間名詞の特性と用法

先に、「翌日」「前日」や「翌年」「前年」には、「今日」「明日」「昨日」の現場（直接）指示性に対して、文脈（間接）指示性があるとしたが、誤解を生じやすい命名である。誤解を招かないためにも、その意味するところを説明しておきたい。

「今日」「明日」「昨日」の現場（直接）指示性とは、指示されているものが、現在をつまみ今（今日・現在・現場）という発話時を基準にして、「発話時の日」であり、「発話時の直後の日」であり、「発話時の直前の日」であることによる。発話時があってはじめて指す内容が決定されるのである。指している時間である「今日」「明日」「昨日」は発話時・現場によっているのである。発話時・今・現場からそれを指示していることから現場性ということばを用いたのである。

一方の文脈（間接）指示性とは、指示されているものが、今（今日・現在・現場）という基準ではなく、広い意味の文脈によって決定される「ある特定の日」や「ある特定の年」を基準としているため文脈性指示と名付けたのである。

これらに共通する指示性は、それらの語自身が指す時間・時点は一定ではなく、ある条件において決定されることと、ある範囲（「日」「年」等）と方向（時間的方向・位置）を示すことである。

文脈指示性時間名詞は、格助詞「に」と共起することもあれば、しないこともある。そして、現場指示時間名詞と大きく異なるのは、指示詞と共起することである。「あの」や「その」が基準となる時間を指すからである。「あの」や「その」が「翌日」そのものを指しているわけではないことに注意したい。

「その春」や「その3時に」などにおいては、指示詞は、「春」や「3時」を指示しうるのである。

- ① 黒い雨.TXT 「【あの翌日】、二・二六事件が勃発してね。
- ② 国盗物語.TXT 【その翌日】、すでにうわさにも聞こえ、光秀なども耳にしていたが、光秀ら十八人の織田家の幕将に対しても、それぞれ任官の沙汰があり、位がさずけられた。

## 4. 時間名詞の特性と格助詞「に」共起

### 4-1. 時間名詞の特性

これまで見てきたように、「今日」等の時間名詞と「春」等の時間名詞とでは、大きな相違が見られる。そこで、「今日」等の時間名詞を「現場起点指示時間名詞」と名付け、「春」等の時間名詞を「一般（非指示）時間名詞」と名付けることにしたい。指示性を持つ時間名詞には、「翌日」などがあるが、これらは現場起点でないことから、「今日」等の時間名詞を「現場起点指示時間名詞」と呼ぶのに対し、「翌日」などの時間名詞は、「文脈起点指示時間名詞」と呼ぶことにしたい。そして、指示されている時間が、幅のある「今日」「明日」「昨日」などは、「現場起点指示時副時間名詞」と仮称しておきたい。

- (1) 現場起点指示時副時間名詞（今日、明日、昨日）
- (2) 文脈起点指示時副時間名詞（翌日、来月、来年）
- (3) 一般（時点）時間名詞（～時、～日、～年）
- (4) 一般（中間）時間名詞（春、夏、秋、冬）

### 4-2. 時間名詞の特性と分類

これまでの述べてきた意味特性に注目して時間名詞を分類しておきたい。

表2. 時間名詞分類表

時間名詞	{	(1) 一般時間名詞（～時、春）
		{ (a) 一般時点時間名詞（～時、～日、～年）
		{ (b) 一般時副時間名詞（春、夏、秋、冬）
		(2) 指示時間名詞
		{ (a) 現場指示時副時間名詞（今日、明日、昨日）注
		{ (b) 文脈指示時副時間名詞（翌日、前日）

表3. 時間名詞の語彙特性（○主要特性）

	時 点	時 副	現場指示	文脈指示	語 例
一般時点時間名詞	○	×	×	×	～時
一般点副時間名詞	○	○	×	×	春
現場指示時幅時間名詞	×	○	○	×	明日
文脈指示時幅時間名詞	×	○	×	○	翌日

## 5. おわりに

本稿は、「相対時間名詞」が格助詞の「に」と接続しないことを説明することを目指したものである。

残された課題も多い。「当日」「近年」「毎日」「毎年」の位置付け、「昨日（きのう）」と「昨日（さくじつ）」、「今日（きょう）」と「今日（こんいち）」、「明日（あす）」と「明日（みょうにち）」の微妙な相違等がそれである。

この他、「春」「夏」「秋」「冬」のような類似した時間名詞の個々の振る舞いの相違や、「午前」「午後」といった時間名詞の相違には一切触れることができなかった。別の機会に譲りたい。



**【付 記】**

本稿は受講生（大学院生）との楽しい対話に触発されたものである。当初、受講生の発表についても触れる予定であったが、相対時間名詞の特性に対する筆者の考え方を示すことにとどまった。別の機会に譲りたい。

**【参考文献一覧】**

- ① 岡田雅彦（1991）「時間名詞の一側面「二」をとるばあいととらないばあいについて」（『横浜国大言語研究』9）
- ② 寺村秀夫（1993）「時間的限定の意味と文法的機能」（『寺村秀夫論文集Ⅰ』）
- ③ 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』
- ④ 増岡隆志（1995）「時の特定、時の設定」（『複文の研究』）
- ⑤ 中村ちどり（1995）「日本語の時間的指示表現における近接性と格助詞」（『言語処理学会第1回年次大会発表論文集』）
- ⑥ 中村ちどり（1997）「時の状況語の「に」の生起要因」（『東北大学留学生センター』第3号）
- ⑦ 森田良行（1989）『基礎日本語』
- ⑧ 伊藤創（2008）「時間名詞の性質と「に」の生起」（『日本語文法学会第9回大会発表予稿集』）

**【用例採集資料】（作品名は省略する）**

- ① 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（新潮社 1995）
  - ② 『毎日新聞 '97 データファイル集』（毎日新聞社 1998）
  - ③ 『CD-ROM版 新潮文庫明治の文豪』（新潮社 1997）
  - ④ 『CD-ROM版 新潮文庫大正の文豪』（新潮社 1997）
  - ⑤ 「青空文庫」（2005年9月19日までのもの）
- \*用例採集にあたっては、筆者作成のプログラム（「Perl」による）を用いた。